

## 第20回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 桂 紹隆 龍谷大学教授

第20回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会理事長）

2010年10月11日インド大使館

桂博士のインド学仏教学界への学問的ご貢献は、(1) インド論理学、特に仏教論理学の研究、(2) ナーガールジュナ研究、(3) アビダルマ研究、(4) 大乘経典の翻訳において顕著であります。

桂博士の研究の第一の柱である仏教論理学については、主としてディグナーガ (ca. 480~530) とダルマキールティ (ca. 600-660) という二人の代表的な仏教論理学者の文献研究とその解釈を行なっておられます。ディグナーガに関しては、『因明正理門論』の一連の翻訳と詳注を公表し、過去の研究の成果を利用して、より正確な原文理解と解釈を学界に提示された点が評価されます。ディグナーガの主著『プラマーナサムッチャヤ自注』については、「因の三相説」の分析とその歴史的考察を公表、とくに三相の定型句中に「限定詞」が導入されることによりインド論理学にパラダイムシフトが起こったことを明らかにし、「アポーハ論」の梗概を提示し、さらにその内容を分析されています。さらに、ダルマキールティ論理学のキーワードの一つである「非認識」の原型が『因明正理門論』に見出されることを指摘すると同時に、ディグナーガ論理学の基本術語である「宗」「同品」「異品」についても明確な定義付けを行なっていることなどを解明されました。

ダルマキールティに関しても数々のすぐれた業績を上げておられます。特に、「ダルマキールティの真理論」は海外の研究者によってしばしば言及され、現代のダルマキールティ研究の主要な成果の一つと見なされています。

桂博士はまた、インド論理学全般の歴史的研究にも取り組んでおられます。ミーマーンサー学派のクマーリラの『シュローカヴァールティカ』、医学書『チャラカサンヒター』の論法を扱う部分に始まり、『ニヤーヤストラ』、『ヴァイシェシカストラ』など、仏教以外の論理学書の推理・論証を扱った部分を特に「論証形式」に注意して調査し、インド論理学の中心概念である「遍充」（正しい論証因は論証対象に包摂されねばならない）という理論が、ディグナーガの『プラマーナサムッチャヤ自注』において初めて明確に言及されることを論証さ

れました。同論文は桂氏が京都大学に提出された学位請求論文の中核をなしたものであります。

その後、一般読者のためにインド論理学を紹介する新書『インド人の論理学』を公刊されました。日本で始めて開かれた「第1回国際議論学学会」において基調講演を行い、世界各国から集まった議論学者たちにインドにおける討論の伝統を紹介して、注目を集めました。インド論理学や仏教論理学に関する平易な論文も数点出版されています。一方、研究書としては、当代の代表的なインド論理学研究者の論考を集めて『インド論理学における〈喩例〉の役割』を編集出版されました。

桂博士の研究の第二の柱はナーガールジュナ研究であり、卒業論文で『廻諍論』を取り上げられたことに始まります。ナーガールジュナの論法の根幹をなす「四句分別」のヴェン図による分析を行い、一方でナーガールジュナの主著『中論頌』の英訳に取り組み、近年は、現ソウル大学の Mark Siderits 氏とともに『中論頌』の英訳と詳注を発表し、本年度内には第27章までの全訳が公表される予定であります。本翻訳は梵語原典からの忠実かつ理解が容易な英訳として既に高い評価を得ており、完訳後は単行本としての出版が予定されています。

桂博士の研究の第三の柱はアビダルマ研究であります。その発端はトロント大学に提出された Ph.D. 論文で『成実論』を研究されたことにあります。所属部派として「多聞部」の可能性があること、「論母」のこと、ナーガールジュナの二諦論を前提としながら独自の修道論を確立していることなど、多くの新しい知見を、その論拠となる箇所翻訳とともに提示されました。さらに、『俱舍論』の「刹那滅論証」などの教義的論証を取り上げ、そのインド論理学的位置付けを試みられました。

桂博士の研究の第四の柱は、大乘経典の現代語訳であります。つとに中央公論社の大乗仏典のシリーズで『法華経』の梵語原典からの翻訳に参加されましたが、その後、故梶山雄一博士らと『華嚴経入法界品』の梵語原典からの世界最初の現代語訳を公刊されました。その副産物として、同経典に見られる「誓願」や「仏伝」に関する論文も公表されました。

以上、インド哲学、とくに仏教論理学の領域における博士のまことに輝かしい業績を概観致しました。オーストリア科学アカデミーの、世界的に著名なシュタインケルナー博士は、過去10年以上にわたってジネンドラブッディ『複注』の梵語写本を解読し校訂出版するプロジェクトを遂行しておられますが、桂博士はその一員として同書の第3章、第4章、第6章の校訂を準備中であります。この事実は、桂博士が、国際的にも高い評価を受けておられことをよく物語っている

ます。また、1997年には、自ら主催者となって、広島国際会議場で「第3回国際ダルマキールティ学会」を開催し、世界各国のダルマキールティ研究者を集め、そのプロシーディングスを編集し、ウィーンから出版されております。このように国際的に目覚ましく活躍されている桂博士は、中村元東方学術賞にまことに相応しい研究者であると判断され、今回の授賞となった次第であります。